

『蜻蛉日記』の副助詞サへ

——平安朝和文における〈周縁波及性〉の意義の一確認——

田中敏生

【論文概要】『蜻蛉日記』から副助詞サへの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈周縁波及性〉に求めるといふ観点から、その使われ方の記述を試みる。その際、附属する成分の種類によって用例を分かった上で、添加にまつわる二事項の間に「本体―周縁」的なありかたの見られることを、用例ごとに逐一検討する。その事を通して、基本義指定の拠り所を求め、併せて、群数性と程度量性とを兼ね備えるという意味での、この語の副助詞性把握の足がかりとする。

【キーワード】後撰集 副助詞 サへ 周縁波及性 群数 程度量

はじめに

本稿は、『蜻蛉日記』から副助詞サへの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈周縁波及性〉に求めるといふ観点から、その使われ方の記述を試みるものである。

これまで何度か述べたように（文献⑬⑭⑮）、平安朝のサへは単独で論ぜられることが少なく、通観的な論考において言及を見るに留まる場合が多い（文献③⑮④）。しかしながら、サへがどのような意義的個性において添加に参加しうるのかを問うことはできるし、それはこの語の副助詞性の内実を考える上でも、また後代におけるダニとの交替現象を理解する上でも、役立ちうるであろう。そうした考え方から、これまで三代集の和歌に即して観察を試みてきた。

ここでは、さらに視界を和文の方面に転じて、『蜻蛉日記』に材を取り

つつ同様の検討を試みたい。即ち、サへがある文中で用いられるとき、その接する項目内容が本体的な事象に対して周縁的な要素であることを示しつつ、本体的な事象に備わるありようを波及的に共有する形でそれに添い加わってゆくことを自身の意義において表わすことをこの語の基本的意義であると捉えた上で、添加にまつわる二つの事項の間に「本体―周縁」的な関係の見出されることをもってその現われと見なし、基本義指定の拠り所にしてゆこうというわけである（注①）。

以下本稿では、右のような考え方のもとに、サへの用例凡そ三十例をその附属する成分の種類によって次のように分かちながら見てゆくが、それは、群数性と程度量性とを両々あい兼備するという意味でのこの語の副助詞性（注②）を、この文献での用例に即して確かめる作業ともなるであろう。

（一）主格成分 一一例

(2) 対格成分	七例
(3) 二格成分	六例
(4) 時の成分	二例
(5) 引用成分	四例

〔合計 三〇例〕

一 主格成分と関わるもの

主格成分に附属するサへは、作品中に十一例見える。これらは、添加にまつわる素材の面から、次のように細分しておくことができる。

I・a…〔或る人間から他の人間へ〕

I・b…〔人間の〕或る要素から他の要素へ〕

II …〔人間から自然へ〕

III …〔自然の〕或る事象から他の事象へ〕

まず、次のような例では、I・a〔或る人間から他の人間へ〕という形で添加のなされているありさまが観察される。

- ①② 《□もいと近きところなるを、〔御門にて車立てり。こちやおはしまさむすらむ〕など、やすくもあらず言ふ人さへあるぞ、いと苦しきありしよりもまして心を切り砕くこちす。返りごとをも、なほせよせよと、言ひし人さへ、憂くつらし》(中、一二三)

- ③ 《かのためでたきところ〔町の小路の女〕には、子産みてしより、〔兼家との仲が〕すさまじげになりたべかめれば、人憎かりし心思ひしやうは、命はあらせて、わが思ふやうに、おしかへしものを思はせばやと思ひしを、さやうになりにしはてはては、産みののしりし子さへ死ぬるものか。》(上、一一四)

- ④⑤ 《さもこそはちがふる夢はかたからめあはではど経る身さへ憂きかな》(上、一五七)

①②は、天禄二年(三十六歳)四月、倫寧邸に移り住んだころの記事である。□部分は欠字だが、頭注では《兼家邸、もしくは兼家邸と倫寧邸との距離に関する簡単な言葉を脱しているのだろう》とされる。家が近いので兼家のことは忘れようにも忘れられず、そのことだけでも心穏やかではないのに、おまけに彼の挙措動静をわざわざ注進に及ぶ人がいたり返事を促す人がいたりして、そういう人たちまでもが恨めしいものに思われてくるといのである。作者に苦痛を与える根本要因はもとより兼家にあるのであって、周りの人たちは作者のことを思つて言葉をかけているに過ぎないはずであるが、そのような人たちにまでマイナスの感情が及んでしまう。それがここでの添加であらう。《周縁波及性》の意義もまた、そうしたありように即して発揮されていると考えられるわけである。

③は天徳元年(二十二歳)以降数年間とおぼしき頃の記事とされる。町の小路の女が出産後は兼家の寵を失い、はては大騒ぎをして産んだ子供まで死んでしまったことを述べている。二人の間柄にとつて根本要因をなすのはもとより当事者どうしの関わり合い方であつて、産まれた子供のほうはその間柄を基盤にして生じたものという意味で第二義的な副次性を帯びる。ここでのサへは「関係の乖離」が、そのような要素にまで及ぶことを表わす。この点に、《周縁波及性》の意義の発揮されるありさまを認めることができると言えよう。

④は、安和元年(三十三歳)七月、村上天皇の喪が明けたころ、登子(兼家同母妹)が作者のところへ来るはずだったのが、不吉な夢を見たためにそれができなくなつて、《見し夢をちがへわびぬる秋の夜ぞ寝がたきものと思ひ知りぬる》と詠んできた、その返しの歌である。「なるほど夢違えは難しいでしょうが、あなたにお逢いできずに過ごしている私までもつらいことです」との意であらう。つらさを感じる第一の人はもとよりその夢を見た本人であるが、そのために逢えなくなつたこちらのほうまで、その思いを抱くに至る。それがここでの添加であらう。サへもまたそのような

ありようを表わすのに用いられているわけである。

次に、左に掲げる例では、I・b（人間の）或る要素から他の要素へ」という形で添加が見られる。先のI・aは、ごく単純な意味で「人間から人間へ」というありようを見せるものであったが、I・bのようなものも、広くはこの方向に添うものであると言えよう（注③）。

⑤《困じにたるに、風は払ふやうに吹きて、頭さへ痛きまであれば、風隠れ作りて、見出だしたるに、》（中、二五八）

⑥④《いまは涙も みなつきの 木陰にわぶる うつせみも 胸さけてこそ 嘆くらめ ましてや秋の 風吹けば 籬の萩の なかなかに そよとこたへむ をりごとに いとど目さへや あはざらば 夢にも 君が 君を見で 長き夜すがら 鳴く虫の おなじ声にや たへざらむと》（中、一八〇）

⑦《かくはあれど、ただいまのごとくにては、ゆくすゑさへ心細きに、ただひとり男にてあれば、年ごろも、ここかしこに詣でなどするところには、このこと〔子どもを授かること〕を申しつくしつれば》

（下、二七九）
⑧④《袖ひつる時をだにこそ嘆きしか身さへ時雨のふりもゆくかな》（中、二六五）

⑤は、天禄二年（三十六歳）七月、二度目の初瀬詣での途次、宇治にある師氏の別邸に立ち寄ったときの記事である。疲れているのに加えて、頭も痛いほどだったので風よけを作ったというのである。フィジカルなコンディションとしては、体全体の疲れていることが基調要因をなし、そこへさらに頭が痛むという局部的な事情までもが加わる。それがここでの添加である。そうした意味で、ここでも、周縁波及的なありようを認めることができる。

⑥は、安和二年（三十四歳）六月、愛宮に贈った長歌の一節である（対格成分の⑥にも同じ長歌の一節が見える）。愛宮の孤独の嘆きを思い遣つ

た部分であり、「まして秋風が吹くようになると、萩の葉が風になびいて、なまじ「そうだそうだ」と答えるだろうそのたびごとに、（夫高明に逢えないばかりでなく）ますます目までも冴えて合わずに眠れないとすれば、夢で夫君を見るということもなくなつて、云々」といった意味が詠み込まれている。夫と生き別れになつてゐることが愛宮の不幸の根本要因であるが、それに加えて、夢の中で逢うといった儚い慰めまでもが奪われる。そうした点に、これまでと同様の添加のありようを見て取ることができると言えよう。

⑦は、天禄三年（三十七歳）二月の記事である。道綱が大いに出世すると夢解きに解かれるような夢を何度か見ているが、そうはいっても、今のような夫婦仲では、今はかりでなく行く末のことまでもが心細い。これが、ここでの添加である。現在の心配事がすでに現実のものであるのに対して、将来のそれは（そうなる見込みは強いものの）未だ実現してはおらず、単に可能性として危ぶまれるに過ぎない。この点に〔本体・周縁〕的なありようが備わると言えよう。

⑧は、天禄二年（三十六歳）九月、風寒く時雨がちな中での感懷を詠んだ歌である。「昔は涙に袖が濡れるだけでも嘆いたが、今ではわが身までもが時雨と降る涙に濡れながら古びてゆくことだ」との意であろう。この歌の場合、一見したところ「周縁から本体へ」といった順序で添加が進行しているかに見える。対象界の秩序に沿えば、「袖」は「身」の付属物に過ぎないとも言えるからである。しかしながら、意識事実の面から言えば、やはり〔本体・周縁〕的なありようを汲み取ることができる。悲しみに濡れそぼつものとしてまず第一に思い浮かぶのは「袖」であると言つてよからう。袖と涙との結びつきを詠み込んだ歌は無数にあり、ほとんど通念になりきっているからである。これに対して、「身」が濡れそぼつというのは、直ちには想い浮かばない。よほどの事情があつて初めて心頭に兆すことがらである。そうした意味で、周縁的な事象であると言えよう。この点

に意を留めるなら、ここでも、周縁波及的な添加がなされていると認めることができるであろう(注④)。

また、次に掲げるように、Ⅱ「人間から自然へ」といった方向で添加のなされているものも見られる(注⑤)。

⑨④ 《なげきつつかへす衣の露けきにとど空さへしぐれ添ふらむ》

(上、九六)

⑩④ 《さもこそは波の心はつらからめ年さへ越ゆるまつもありけり》

(下、三六一)

⑨は、天曆八年(十九歳)十月に、作者側の物忌みで逢えないのを兼家がもどかしがって贈ってきた歌である。逢えないことを嘆く人にとって、袖が涙で濡れることは情感の直接的な発露であり、その意味で中心的なことがらであると言える。これに対して、空が時雨れることは、たまたま時を同じくして生じた自然現象であり、無情世界における偶合的なできごとに過ぎない。この点に「本体―周縁」的な添加のありようが認められると言える。

⑩は、天延二年(三十九歳)十二月、道綱が「八橋の女」に贈った歌である。これに先立つて道綱は、

・われならぬ人待つならばまつといはでいたくな越しそ沖つ白波

と詠んでいた。他の男との噂を耳にしての詠である。もとより末の松山の歌(古今・一〇九三)を踏まえていて、「波越す」は「あだし心」を懐くことを意味する。それに対して女は、

・越しもせず越さずもあらず波寄せの浜はかけつつ年をこそふれ

と詠み返してきた。誰に対しても平等な気持ちを懐いているとの意であろう(動詞「かく」については文献②④)。⑩は、それに対してさらに詠み返した歌である。既に年の瀬も押し詰まっていた。歌意は「なるほど冷たいお心ですね。私は、不実な心に翻弄されたうえに、年にまで越えられて待ちぼうけを喰わされるまつなでした」といったふうなものであろう。道

綱にとつては相手の無情さこそが不本意さの根本要因であるが、そこからさらに、待たされたあげくに年を越すという派生的な事項が上乘せされる。このあり方を表わすのに、〈周縁波及性〉の意義が供されていると言える。

さらに、次のような例では、Ⅲ「(自然の)或る事象から他の事象へ」という形で添加のなされるありさまが見られるであろう。

⑪ 《三日になりぬる夜降りける雪、三四寸ばかりたまりて、今も降る。

簾を巻きあげてながむれば、「あな寒」といふ声、ここかしこに聞こゆ。風さへはやし。世の中いとあはれなり。》(下、二七五)

右は、天禄三年(三十七歳)二月、降り積もる雪の中で人々の寒がっているありさまを述べている。雪に加えて風までもが激しく吹くというのが、ここでの添加である。寒さを感じさせる根本要因はもとより雪が降り積むことにあるのであって、風の強く吹くことは、この基調の上に立ちながら「寒さ」を上乘せする要因であると言える。この点に「本体―周縁」的なありようを認めることができる。サへもまた、このあり方に根ざして働くわけである。

こうして主格成分に附属するサへにあつては、さまざまなありようにおいて「本体―周縁」的な添加をなすのに用いられているありさまが観察されるであろう。〈周縁波及性〉の意義もまた、そうしたあり方に即して發揮されていると考えられるわけである。

二 主格以外の成分と関わるもの

冒頭にも示したように、主格以外の成分と関わるサへには次のようなものがある。ここでも「本体―周縁」的な添加を行なうのにサへの働くありさまを観察することができる。

対格成分

七例

二格成分	六例
時の成分	二例
引用成分	四例

〔合計 一九例〕

第一に、対格成分と関わるサへは都合七例見える。このうち、次のような例では、或る人から他の人へという形で添加が見られる。この点で、主格成分の冒頭に掲げた諸例(①)と類比的であろう。①②の動詞述語は、添加の第二項であることを第一項への所属関係として言い表わしたものと見ることもできる。

①《それより、まだうしろめたき人をさへ添へてしかば、いかにいかにと念じつつ、七月一日の日、あかつきに來て、「ただいまなむ帰れたまへる」など語る。》(中、一八二)

②《「ここにも、いまはかぎりに思ふ身をばさるものにて、かかるところに、これをさへひきさげてあるを、いといみじと思へども、いかがはせむとてありつるを、(後略)》(下、二八二)

③《人などみな出でぬと見えて、この人(「道綱」)は歸りて、「兼家の」御送りせむとしつれど、『きんぢ(「道綱」)は呼ばむ時に來(こ)』とて、「兼家は」おはしましぬ」とて、ししと泣く。いとほしう思へど、「あな痴れ。そこ(「道綱」)をさへかくてやむやうもあらじ」など言ひなぐさむ。》(中、二三一)

①は、安和二年(三十四歳)六月、兼家が幼い道綱を連れて御嶽詣に出かけたときの記事である。兼家本人が出かけるだけでも気がかりなのに、幼い道綱まで連れて行ったのでよけいに心配するむね記している。金峰山に参ずるのはもとより兼家の発意によるものであつて、幼い道綱は単なる同行者として彼に伴なわれているに過ぎない。そうした意味で「本体―周縁」的なありようを認めることができる。

②は、天禄三年(三十七歳)二月の記事である。作者は、兼忠の女と兼

家との間にできた娘をもらい受けようとした。ここは、それを伝えに行つた法師に対して、兼忠の女が承諾するむね語っている言葉である。「私としても、万事休した自分のことはともかく、こんな田舎に娘まで引き連れてくるのを、とても不憫には思うものの、どうしようもないまま過ごしてきたのですが」といったほどの意味であろう。「自分自身が不幸である上に、娘まで道連れにしている」というのがここでの添加の中身であろうかと思われる。兼家に見限られた当人の不幸が、そうした事情を与り知らぬ娘にまで及んでゆくわけであつて、サへもまた、このありように即して自身の意義を発揮していると言える。

③は、天禄二年(三十六歳)六月、鳴滝籠もりをした作者を連れ戻しに兼家がやつてきたときの挿話である。道綱は兼家と一緒に帰るつもりだったのだが、車のところで追ひ返されて母の許までもどつて來た。母への伝言がうまく行かないので叱られたという経緯もあつて、父に見捨てられたのではないかと道綱は泣きじゃくっている。それを慰める母の言葉の中には「サへが用いられている。」「お前までこのままほつたらかしにすることはなかるう」というのである。兼家と不仲なのはあくまで母親なのだから、道綱はいわばその「とばっちり」を受けることを嘆いていることになる。この点に「本体―周縁」的なありようが備わると言えよう。

次のような例では、もはや人から人へという形はとらず、単に動作の及ぶ対象における添加となつてゐる。

④《人やりならぬわざなれば、とひとぶらはぬ人ありとも、夢につらくなど思ふべきならねば、いと心やすくあるを、ただ、かかる住まひをさへせむとかまへたりける身の宿世ばかりをながむるにそひて、悲しきことは、》(中、二三四)

⑤《昼つきた、「渡らせたまふべし。」「ここにさぶらへ」となむ、「兼家の」仰せごとありつる」と言ふ(「兼家邸の」ものどもも來たれば、これかれ騒ぎて、日ごろみだれがはしかりつるところどころをさへ、ご

ほごほとつくるを見るに、いとかたはらいたく思ひ暮らすに、暮れ果てぬれば、来たる「兼家邸の」をのこども、「御車の装束などもみなしつるを、などいままではおはしまさざらむ」など言ふほどに、やうやう夜も更けぬ。》(中、二五四)

④は、天禄二年(三十六歳)六月、鳴滝に籠もっている時の思いを記した部分である。添加の基盤事項は示されていないが、この日記の随処に見える心の角突き合いや夜がれの嘆きなどが、それに当たると言えよう。それは、少なくともこの作者には家常茶飯のできごとであつたらしいし、また他の人々にとつても多かれ少なかれ生じ得た事柄であろう。これに對して、寺に籠もつて出家同然の暮しをするというのは、いささか常軌を逸している。そうした意味で、「本体―周縁」的な添加がなされていると言えよう。

⑤は、天禄二年(三十六歳)七月、鳴滝籠もりから帰つた作者を待ち受けていた日常生活を述べ始める部分である。兼家邸から従者まで送りつけてきたのだから期待も大きかつたのであろう、一通りの片付けをするばかりでなく、この際とばかりにちよつとしたメンテナンスにまで及んでいる。人を迎える際の通常の用意を本体的とするならば、普通ならそこまではしないような事柄は周縁的と見なすことができよう。そうした意味で、周縁波及的な添加がなされていると認められる。

次のような例は、実質的には時点をめぐる添加と見なしうるが、添加そのことにかかわる意味を動詞を用いて表わしているため、形としては対格成分となっている。

⑥a 《ましてながめの 五月雨は うき世の中に ふるかぎり 誰が袂か ただならむ たえずぞうるふ 五月さへ 重ねたりつる 衣手は 上下分かず くたしてき》(中、一七九)

⑦ 《「ただいまさぶらふ」と言はせて、しばしあるほどに、雨いたう降りぬ。夜さへかけてやまねば、えものでせて、「情なし。消息をだに」

とて》(下、三四五)

⑥は、安和二年(三十四歳)六月、愛宮に贈つた長歌の一節である(主格成分の⑥にも同じ長歌の一節が見えた)。夫の高明はすでに安和の変で流されており(三月)、愛宮も出家した。それを伝え聞いての詠である。「もの思いに沈む五月の長雨には誰しも袖が濡れるが、その袖の濡れやすい五月までが二度も重なるので、重ねた袖も上から下まで、身分の高下に関わりなく、(濡れまざつた末) 朽ち果ててしまった」——およそそういったふうな意味が詠み込まれている。和歌的な修辭がふんだんに散りばめてあつて添加の意味も単純には決めにくいが、縮約すれば「本来の五月に加えて閏五月までも加わる」の意となろう。そう考えるなら、正規の五月の本体性と臨時の五月の附屬性といった軽重差を見出すことができる。サへもまた、そうした關係に根ざして自身の意義をはたかせていると言えよう。

⑦は、天延二年(三十九歳)五月、遠度と呼ばれて道綱が出かけようとしたが、あいにく雨に遮られて出られないという場面である。日中に降り始めた雨が、夜になつてもまだ止まないというのが、ここでの添加の中身である。激しい雨なのだから、降り始めたころなら「止まず」ということももつともなことだが、時間が経つほどそれがふさわしいものではなくなる。そうした意味で、「本体―周縁」的なありようを認めることができるであろう(注⑥)。

第二に、二格の成分と関わるサへとしては、次の六例がある。

①a 《そこにさへかるといふなる真菰草いかなる沢にねをとどむらむ》(上、一〇三)

② 《「兼家の手紙の」かたはなべきところは破り取りてさし出でたれば、「遠度は」簀子にすべり出でて、おぼろなる月にあてて、久しう見て入りぬ。「紙の色にさへ紛れて、さらにえ見たまへず。昼さぶらひて見たまへむ」とてさし入れつ。》(下、三四七)

③《あぢきなく、あまたにさへしひなされて、これらが中に漁火と群鳥とはとまりにけり、と聞くに、ものし。》(中、一八六)

④《その寮(つかさ)の頭、叔父にさへものしたまへば、まうでたりける、いとかしこうよろこびて、》(下、三三二)

⑤《(前略)「私が」はべらざらむ世にさへ、「道綱を」うとうとしくもてなしたまふ人あらば、つらくなむおほゆべき。年ごろ、御覧じはつまじくおぼえながら、かはりもはてざりける御心を見たまふれば、それ「道綱」いとかへりみさせたまへ。》(中、一七六)

⑥《(前略)さりとともい一度はおはしなむ。それにさへ出でたまはずは、いと人笑はえにはなり果てたまはむ」など、ものほこりに言ひのしるほに》(中、一三八)

①は、天曆十年(二十一歳)、正室時姫のところでも兼家が無沙汰がちであるのを聞いて、作者が時姫に送った歌である。修辭を凝らしているが、趣意は「あなたのところにまであの人がよりつかないと聞いておりますが、いったいどこへ通っているのでしょう」といったものである。二人の間での私信なのだから、添加の基盤事項としては作者自身を想定している。見ておいてよいであろう。人間を場所的に捉えることで二格の形を取っているが、対格の①③がそうであったように、実質的には或る人から他の人へという方向での添加となっている。作者の産んだのが道綱ひとりだったのに対して、時姫の子女は多く、あるいは摂関家を継ぎ、あるいは入内するなど、枢要の地位を占めている。そのような人にまで「かる」ということが及ぶわけであって、この点に、周縁波及的なありようが備わると言えよう。

②は天延二年(三十九歳)五月、遠度が作者の養女を性急にもらいたがるので、兼家の意向をつぶさに解らせようとして、その手紙の一部を破って見せた場面である。遠度は「月の光が朧ろなうえに」紙の色にまで墨が紛れてまったく読めない」と答えて手紙を中に返した。「色に」の「に」

は、所謂「原因」を表わす二格であると言えよう(文献②、四一六頁)。文字を読むためには明るい光がまずは必要だという意味で、おぼろな月の光は、手紙の読みにくさをもたらす基調的な要因であり、そこにさらに、紙の色が墨と鮮やかな対照をなさないことが付随的な要因として加わる。それを表わすのがここでのサへであると言えよう。(周縁波及性)の意義に基づいてそれがなされるわけである。

③は、安和二年(三十四歳)八月、師尹(兼家の叔父にあたる)の五十の賀の屏風に歌を詠むようしむけられたことを述べたくだりである。不本意であるうえに、何首も詠ませられる羽目に立ち至ったとの意であろう。もともと作者はこの詠作に気乗りがしなかった。依頼があったときに《いとしらじらしきこととて、あまたたび返すを》(一八四頁)とあって、何度も辞退したことが知られる。《責めてわりなくあれば》(同)ということ(注⑦)、不承不承に引き受けたのであった。初めは一・二首ですませるつもりであったらしい。《宵のほど、月見るあひだなどに、一つ二つなど思ひてものしけり》(同)とある。それがいつのまにか沢山詠むことになってしまったわけである。こうしてここでも、不本意さをめぐる基調要因に対して、付随的な要因が加わる。サへもまた、このあり方に根ざして働いていると言えよう。

④は、天延二年(三十九歳)一月、除目で右馬の助になった道綱が、右馬の頭に挨拶に行くことを述べた部分である。挨拶に行くのは、まずなによりも役職上の関わりあつてのことであるが、おまけに叔父にあたる人でもあつたのだというのがここでの添加の中身である。職務上の関係にとつて、血のつながりは二次的・付随的なものにすぎない。この点に、先と同様のありようを見て取ることができよう。

⑤は、安和二年(三十四歳)閏五月、病に臥した作者が認めた遺書の一節である。自分とはかく道綱のことはよろしく頼みたいむね述べている。「私のいなくなった時にまで(道綱を)疎んずるお方がいらついたら、

冷淡だと思ひそうです」との意であろう。兼家が寄りつかないのは、作者との不仲が原因なのだから、その当人がいなくなった世というのは、疎遠な態度をとる理由を欠いている。ここでのサへは、疎ましくする態度が、そのような必然性の薄い場合にまで及んで行くことを表わす。〈周縁波及性〉の意義においてそうするわけである。

⑥は、天禄二年（三十六歳）六月、鳴滝籠もりの作者に下山を勧めに来た使いの者の言葉である。「それでも兼家様がもう一度はお見えになるでしょう、その時にまで下山をお断りになると、まったくもって物笑いのたねとおなりあそばすでしょうよ」などと言っている。兼家は既に一度山まで迎えに来ているが、そのときは帰らなかった。一度ならず二度までもとなるのは良くないでしょうとの趣意である。下山を断ることが、まだしも容認される場合から、そうは行きかねる場合にまで及んで行くわけであつて、この点に周縁波及的なあり方を認めることができると言えよう。

第三に、時を表わす成分に附属するサへが二例見える。事実上時の成分に附属すると見なしうるものは、対格成分の⑥⑦や二格成分の⑤などにも見られたが、ここでは形の面でもそのあり方が明瞭なわけである。

①《（前略）このたびさへなうは、いとつらうもあるべきかな》

（上、九二）

②《今日、殿おはしますべきやうになむ聞く。こたみさへ下りずは、いとつべたましきさまになむ、世人も思はむ。》（後略）

（中、二四九）

①は、天曆八年（十九歳）に兼家から送ってきた手紙の文言である。「これまでに加えて」今度まで代筆だと、とても冷たいというものでしょう」との意であろう。返事を期待する人間にとって、直筆の返事の無いことへの落胆は回を重ねることに嵩じて行くと言えよう。後になるほど受け入れ難いわけであつて、そうした意味で周縁波及的な添加がなされていると認められるであろう。

②は、天禄二年（三十六歳）六月、鳴滝籠もりの作者のもとに届いた手紙の一節である。「今から兼家様が迎えにいらつしやるように聞いています、今回もまた山を下りないなら、頗る冷淡なるまいだと世間の人も思うでしょう」と述べている。これまでも、兼家の使い、親族、道隆などが説得にやってきたし、手紙で下山を勧める者もいたが、すべて「否」の一点張りだった。それらに加えて今回までもの意である。兼家自身が来るのもこれで二度目になる。行き掛かりということもあるから、一度や二度勧められたからといってすぐ説得に応じるのも不甲斐ないかもしれないが、いくらなんでも今度降りなければ、あまりに強情だということにもなりかねない。そういった場合にまで拒否が及ぶことを表わすのがここでのサへである。〈周縁波及性〉の意義がそのように発揮されていると考えられるであろう。

最後に、引用成分と関わるものが四例見える。

①《ゆく人（「倫寧」）もせきあへぬまであり、とまる人（「作者」）はたまいて言ふかたなく悲しきに（中略）「君をのみ頼むたびなる心にはゆくすゑ遠く思ほゆるかな」とぞある。見るべき人見よとなめりとさへ思ふに、いみじう悲しうて、ありつるやうに置きて、》（上、九七）

②《（前略）いとおほけなき心のはべりけると、思し咎めさせたまはむを、つつみはべるになむ。ついでなくてとさへ思ひたまへしに、司召見たまへしになむ、この助の君（「道綱」）の、かうおはしませば、まゐりはべらむこと、人見咎むまじう思ひたまふるに」など、いとあるべかしう書きて、》（下、三三五）

③《さまかはりたる人々ものしはべりしに、日も暮れてなむ、使ひもまゐりにける。「なげきつつ明かし暮らせはほととぎすみのうのはなのかげになりつつ」いかにしはべらむ。今宵はかしこまり」とさへあり。》（下、三五〇）

④《この中川もひとつにゆきあひぬべく見ゆれば、いまや流るる

とさへおぼゆ。》(下、三三二)

①は、天曆八年(十九歳)、父倫寧が陸奥の国へ旅立つときに、兼家に娘(作者)を託するむね詠んだ歌に、作者が目止める場面である。「父と別れるのが悲しいうえに、このように自分を氣遣う親心まで知ってしまったので」といったほどの意味であろう。悲しい思いを惹き起こすものとしては、親子が離れ離れにならざるを得ないという不可避の状況が根本要因をなすが、自分を氣遣う親心を知ることが、さらに付随的に加わる。この点に「本体―周縁」的なありようが認められよう。《周縁波及性》の意義もまた、このあり方に即して發揮されていると考えられるわけである。

②は、天延二年(三十九歳)二月、作者の養女を娶ろうとする速度の手紙の一節である。ここでは来訪を希望するむね伝えてきている。「今まで是不躰けな願いだと遠慮していたし、そのうえ、適切な機会がないものだからと考えたりもしていたけれど、幸い道綱が同じ部局になったので、参上しても不自然ではないだろうと思う」といった趣意である。参上を憚っていたのは、そもそも分不相応な願い出だというのが根本的な理由だが、自然なきつかげが得られないということもさらに付随的に加わる。この点に「本体―周縁」的なありようが備わると言えよう。

③は、天延二年(三十九歳)五月の記事である。あれほど性急だった速度が、兼家の手紙を作者が見せたあと、急に態度を改めた。手紙を見にもう一度おいでになりますかとこの意をこちから伝えようとしたが、大勢の僧侶がいてうまく伝わらなかった。そのことの言い訳を速度が書いてきた場面である。夜分に訪れては《宿直ばかりを、簀の端わたり許されはべりなむや》(三三九頁)などと剥き出しに要求を突きつけたりしていたのに較べると、大きな変わりようである。押しかけてこないばかりか、しおらしく詫びの言葉まで述べている。それがここでの添加の中身であると考えられよう。サへもまた、このあり方を表わすのにはたらくわけである。

④は、天延二年(三十九歳)九月、前月から降り始めた雨が止まず、川水の増えまさるさまを述べている。当時作者は《広幡中川のほど》(三一六頁)に移り住んでいた。中川は今の寺町のあたりを流れていた川であり、邸は《賀茂川と中川との間にちがいない》(同、頭注)とされる。その二つの川が合わさってしまいそうなほど増水は激しかった。そこで、今にも家が流されるのではないかという思いに駆られることになる。あまりにさまざまな光景を眼前にして、仮想の世界においても戦きに充ちた危惧が心をよぎる。それがここでの添加であろう。《周縁波及性》の意義もまた、そのようなあり方に根ざしてはたらいっているのだと考えられよう。

むすび

以上、『蜻蛉日記』のサへ凡そ三十例を取り上げて、その使われ方を見てきた。そのそれぞれの用例において、添加の二事項における「本体―周縁」的な関係を見て取ることができたのではないかと思われる。要を撮って示すならば、主格成分にあつては人間から人間へという方向のものを中心に、人間から自然へ、また自然界の事象どうしといったあり方において「本体―周縁」的な添加のなされるありさまが見られたし、対格・二格の成分やその他の成分にあつても、それぞれに同様のあり方が認められたと言つてよいであろう。こうした点に、《周縁波及性》というこの語の基本的な意義の發揮されている事情を汲み取ることができるわけである。サへが添加に働くということの意味的な内実もまた、そのようなものとして理解することができるのだと言えよう。

この語の副助詞性ということについても、こうした基本的意義に基づいて把握することができる。サへは、二つの事項の関係を表わす点で群数性を有するとともに、その関係規定が「本体―周縁」的な軽重関係に基づくという限りに程度量性をも帯びるのであつて、こうした二面を両々あい重

ね持つ点に、瞭たる副助詞性が備わるのだと言えよう。この語が『あゆひ抄』にあつて「だに家」に摂せられる（文献⑩、二四六頁）ことの理由もまた、この点に存すると考えられるわけである。

最後に、この文献でのサへの使われ方を構文環境の面から振り返ってみると、おおよそ次のように整理される。

第一に、仮定条件句で用いられるサへが見られる。

- ・「いとど目さへや あはざらば」（主格・⑥）
- ・「（前略）はべらざらむ世にさへ、うとうとしくもてなしたまふ人あらは（後略）」（二格・⑤）

・「（前略）それにさへ出でたまはずは（後略）」（二格・⑥）

・「（前略）このたびさへなうは（後略）」（時・①）

・「（前略）こたみさへ下りずは（後略）」（時・②）

この種の用い方は、和歌の方面では古今に見え（あすさへ降らば、二〇・不知）、拾遺（後さへ人のつらからば、九八五・不知）、後拾遺（こよひさへあらばかくこそ思ほえめ、七一・和泉式部）、詞花（我さへ人を忘れなば、二五一・不知）などにも現われる。これらは、サへが仮定条件句の詞的素材内容と同次的に働きうることを示唆している。この点で、目を留めておいてよい事柄であろうかと思われる。

第二に、否定述語と共に用いられる例が見られる（○を付したものは、仮定条件句の例と重なる）。

- 「いとど目さへや あはざらば」（主格・⑥）
- 「（前略）それにさへ出でたまはずは（後略）」（二格・⑥）
- 「（前略）このたびさへなうは（後略）」（時・①）
- 「（前略）こたみさへ下りずは（後略）」（時・②）
- ・「夜さへかけてやまねば、えものせで」（対格・⑦）
- ・「あな痴れ。そこをさへかくてやむやうもあらじ」（対格・③）

初めの四例はいずれも否定的事態全体において添加のなされることを表わ

す。現代語のマデをめぐる文献⑫の用語を援け用いるならば、「Wスコープ」ということになる。また第五例のサへは、直接には「かけて」とかわると見られるが、後続部分まで含めて考えれば、これもWスコープ的であると言えよう。これに対して第六例は、体言「やう」を介するものではあるが、意味的には「Nスコープ」的であると認められよう。Nスコープのサへは、古今（夢路をさへに人はとがめじ、六五七・小町）、後撰（着る人さへは変らざりけり、一四七・不知）、拾遺（色さへあやなあだに散らすな、三一・能宣）などに見られたが、この日記では、どちらかと言えば、Wスコープに偏る傾向が見られるということになるであろうか。

第三に、命令・希求など、実現を期する文で用いられるサへは、和歌であれば古今に「末さへよりこ」（一〇七八・神遊びの歌）「事の葉さへもきえななむ」（八五四・友則）のような例が見られたが、この作品では見出すことができなかった。

周知のように、万葉のダニは、その用いられる構文環境が意志・命令・願望・疑問・否定・仮定等々に限られるという特徴が見られたし（文献②）、平安時代に入っても、願望表現・仮定条件句・否定文などで用いられる例が（新たに生じた類推表現での用法とともに）大きな用法群をなしている（文献⑧・⑩、⑫）。後代では、このうちの仮定条件句や否定文での用法を（類推表現での用法とともに）サへが肩代わりすることになるが、そうした移行行きを頭に置かならば、交替を遂げる以前の、この種の構文環境におけるサへのあり方についても、努めて視界に収めておく必要があるうかと思われる。

冒頭にも記したように、平安朝のサへについては、その詳しい実態の解明はあまり進んでいないかに見受けられる。本稿では、そうした状況にも鑑みつつ、蜻蛉日記におけるこの語の観察を試みてきたのであった。

〔付記〕『蜻蛉日記』の本文は次の文献に依った。

・新編日本古典文学全集『土佐日記 蜻蛉日記』（木村正中 伊牟田 経久 校注・訳 小学館 一九九五）

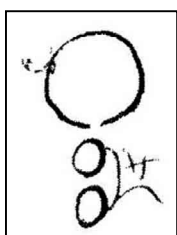
用例の掲出に際しては次のような行き方をとった。

- ・末尾に巻の別と頁数とを添えた。
- ・歌（長歌を含む）の用例には「@」を付した。
- ・地の文等に和歌が引かれている場合は――に括って示した。
- ・ふりがなを（ ）に括って示した場合がある。
- ・引用者による注解を適宜「」に括って挿入した。

年代の比定と作者の年齢についても右の文献に依っている。

なお『蜻蛉日記』の副助詞ダニについては文献⑧で、同じくノミについては文献⑪で、それぞれ論じている。併せご参照頂ければ幸いである。

注



〔注①〕サへの基本的意義についてのこのような捉え方は、夙く『稿本あゆひ抄』の欄外に見える図形にその淵源を窺うことができる。そこでは、大きな円の下に小さな円が二つ並び、その傍らにサへと記されている（文献⑤、三九四頁。文献⑥、一一一頁。上図は後者による）。また、松尾捨治郎『国語法論攷』（文献⑪、四五六頁）にもサへを、『副武的』とする見解が明瞭に述べられている。本稿でのサへの捉え方も、これまでと同様、これら先学の知見からの触発に基づいている。

〔注②〕群数性および程度量性を根幹として副助詞の類的性格を把握する見方は、文献⑫に基づく。文献⑦・⑩では「量性の意味領域で働く」という点から副助詞を捉えていたが、本稿では、より分析的なこの観点を取ることにする（文献⑫・⑬でも同様）。そうすることの意味については、文献⑫の「むすび」参照。

〔注③〕三代集では拾遺集にこの種のものが見られた（文献⑮、七五頁）。

〔注④〕「袖―身」の組み合わせは古今集に先蹤が見える。

・浅みこそ袖は漬つらめ涙河身さへながると聞かばたのまむ（古今・六一八、業平）

文献⑬（五四頁）では「主副的連繫」というタイプを立てて右の歌もこれに撰したが、ここでは、⑧の歌も「人間における或る要素から他の要素へ」というタイプに含めておくことにする。

〔注⑤〕この種のものは三代集の和歌に多く見られた（文献⑮、七十七頁の【表Ⅰ】のB）。蜻蛉日記でも用例は和歌に限られている。

〔注⑥〕動詞「かく」については、文献⑭に内面的意義の方面についての立ち入った分析が見られる。

〔注⑦〕この「責めて」は副詞として受け止めることもできる（文献①）。

参考文献

- ①井手 至（一九五五―二〇〇三）『国語副詞の史的研究（一）副詞「せめて」について』『人文研究』六卷五号（『国語副詞の史的研究』（一九九一 新典社。二〇〇三 増補版）所収。引照は後者・増補版による）
- ②加納協三郎（一九三八）「だに」「すら」の用法上の差異に就て」『国語と国文学』一五巻六号
- ③此島正年（一九六六）『国語助詞の研究』（桜楓社）
- ④鈴木ひとみ（二〇〇五）『副助詞サエ（サへ）の用法とその変遷―ダニとの関連において―』『日本語学論集』一号（東京大学）
- ⑤竹岡正夫（編）（一九六二）『富士谷成章全集・上』（風間書房）
- ⑥竹岡正夫（解説）（一九七八）『稿本あゆひ抄』（勉誠社文庫・四五）
- ⑦田中敏生（二〇〇三）『集中的専一性における項目限定性と事態波及性―古今和歌集における副助詞ノミの意味的なはたらき方をめぐって―』藤岡忠美先生喜寿記念論文『古代中世和歌文学の研究』（和泉書院 所収）
- ⑧田中敏生（二〇〇七）『蜻蛉日記』における副助詞ダニの諸用法とその連関―「相対的軽少性」の意義に基づく統一的理解の試み―『四国大学紀要』（人文）二八号
- ⑨田中敏生（二〇〇八）『枕草子』の副助詞ダニ―中古における「相対的軽少性」の意義の一確認―『四国大学紀要』（人文）三〇号
- ⑩田中敏生（二〇〇八）『大鏡』の副助詞ダニ―平安時代における「相対的軽

- 少性〉の意義の一確認——『言語文化』六号（四国大学）
- ⑪ 田中敏生（二〇一一）『蜻蛉日記』の副助詞ノミ―集中的専一性の意義の諸発現——『言語文化』九号（四国大学）
- ⑫ 田中敏生（二〇一二）『古今和歌集』の副助詞タニ―〈相対的軽少性〉の意義をめぐって——『四国大学紀要』（人文）三八号
- ⑬ 田中敏生（二〇一二）『古今和歌集』の副助詞「サへ」―基本義〈周縁波及性〉措定の試み―『言語文化』一〇号（四国大学）
- ⑭ 田中敏生（二〇一三）『後撰和歌集』の副助詞サへ―平安朝和歌における〈周縁波及性〉の意義の一確認——『四国大学紀要』（人文）三九号
- ⑮ 田中敏生（二〇一三）『拾遺和歌集』の副助詞サへ―平安朝和歌における〈周縁波及性〉の意義の一確認（其二）―『四国大学紀要』（人文）四〇号
- ⑯ 田中敏生（二〇一四）『万葉集』の副助詞スラ―基本義〈把同的極限性〉措定の試み―『言語文化』一一号
- ⑰ 田中敏生（二〇一三）『万葉集』の副助詞タニ―上代における〈相対的軽少性〉の意義の確認——『四国大学紀要』（人文）四二号
- ⑱ 田村清子（一九八四）『副助詞の変遷―その契機の解明を中心に―』『国語と教育』九号（長崎大学）
- ⑲ 中田祝夫・竹岡正夫（一九六〇）『あゆみ抄新注』（風間書房）
- ⑳ 茂木俊伸（一九九九）『とりたて詞「まで」「さへ」について―否定との関わりから―』『日本語と日本文学』二八号（筑波大学）〔著者pdf版による〕
- ㉑ 松尾捨治郎（一九三六）『国語法論攷』（白帝社増補版（一九七〇）による）
- ㉒ 森重 敏（一九五四）『群数および程度量としての副助詞「国語国文」二三卷二号
- ㉓ 山田孝雄（一九三六）『日本文法学概論』（宝文館）
- ㉔ 渡辺 実（一九七八）『同根の動詞・副詞・接尾動詞』『論集日本文学・日本語 5 現代』（角川書店）

（田中敏生 四国大学文学部国語学研究室）